

せんだい・みやぎ

NPOセンター

ニュースレター

Vol.2

みみん

せんだい・みやぎNPOセンター 創立10周年にむけて

せんだい・みやぎNPOセンターはおかげさまで2007年11月に10周年を迎えます。そこで、仙台・宮城の市民活動の10年間のあゆみを中心に、当センターのオビニオンを全5回で、10周年準備号として発信していきます。

- p1 突撃！こちらNPO取材班
- p2~5 第2回みみん座談会
- p6 代表理事オビニオンコラム 大滝精一
- p7 寄稿ささやかな貢献 椎子康之さん
- p8 スタッフNPO体験記
- 常務理事エッセイ ベニクロサンバ 黒澤 学
- お知らせ、編集後記、連絡先等



突撃！こちらNPO取材班

NPO法人リブリッジ

代表理事：山崎 環さん

「アートで街を楽しくしよう」

定禅寺通りメディアアートのすくそばに「リブリッジ・エディット」というコミュニティギャラリーがあるのをご存知ですか？ NPO法人リブリッジが運営するこのギャラリーは、東北の若手アーティストの映像や絵などの作品発表の場や、情報発信の拠点になればと3年前にオープンしました。

年間約30名のアーティストがここを利用し、ギャラリーという何も無い空間に展示をしていく中で、個性や創造性が生み出され、育てられていく場所になっています。また、アートを通じて多くの人とコミュニケーションが生まれています。

NPO法人リブリッジは2003年9月に発足し、日常を楽しく魅力的にする文化的活動や、心豊かに暮らせる街にすることを理想とし、アートを通じていろいろな活動を行っています。ギャラリーの運営の他にも、最近では若手アーティストの公募作家展の開催や、仙台市内のホテルと連携し、東北のアーティストの作品を客室に展示する取り組みを行っています。この様に企業がNPOと連携し活動に協力することで、NPOにも信用性がついてくるようになり、アーティストの力づけにもなっているそうです。アーティストの間ではギャラリーや団体の存在が知られるようになり、アートに関する情報が集まるようになったとのこ

と。継続して活動してきたことが情報の蓄積にもつながっているのですね。



ギャラリー リブリッジ・エディット
tel 022-221-9979
OPEN: 11:30~19:30
定休日: 毎週月曜日・年末年始・その他臨時
ギャラリーのお問い合わせは、事前にお電話
やメールにてご連絡下さい。

今後は創り手が作品を見せる場所、それを売る場所、また学べる場を創り、アート分野の基盤を固めていきたいと考えているとのこと。そしてその基盤をメンテナンスしながら技術や文化伝承に繋げ、これからも毎日アートが感じられるような楽しく暮らせる街づくりをめざしていきたいと団体のビジョンを話していただきました。アートによって仙台がますます魅力的な街になっていくのが楽しみです。

NPO法人リブリッジ
<http://re-bridge.or.jp/about2.html>

担当：伊藤浩子



第2回テーマ

子どもと市民活動の10年

子どもをめぐる社会状況の変化と宮城における市民活動の10年を、子育てや子どもの不登校、子どもの遊びの環境づくりの支援などを行ってきた、3団体に検証していただきます。

みんな
座談会

minmin

当センター10周年に向けて、仙台の市民活動の歴史を俯瞰し、次のステップへの礎とするために、仙台で活躍されている市民活動団体に全5回、5つのテーマでお話をうかがいます。

座談会では、その内容をダイジェスト版として掲載し、詳しい内容は10周年記念誌として発行する予定です。

■団体の活動について

針生 まず、皆さんの団体の歩みと活動について紹介をしていただきたいと思っています。

大村 1975年に遊びを通じた体験学習やコミュニティの拠点となる「プレーパーク」の活動を東京で始めました。1987年に「仙台冒険あそび場」が誕生し、外から応援してきました。2002年に仙台での活動の連合体となる、「冒険あそび場ーせんだい連絡会」を設立。2005年にはエリアを拡大してNPO法人化。2006年に東洋緑化(株)と共同企業体を組織し、海岸公園冒険広場及びキャンプ場の管理運営業務を指定管理業として受託しました。

土佐 学習塾や予備校で勤務した経験を生かし、地元である宮城県でできることはないかと考えたところ、宮城県の高校中退者が全国で9番目に多いということ朝日新聞(平成10年12月)でみたのが活動を始めるきっかけです。不登校児や高校中退者などに高校卒業(資格取得)への情報提供をすることを目的にミヤギユースセンターを2001年に設立し、同年に法人化しました。その後、2004年に英語教育に携わる方の情報交換の場として宮城英語教育支援協会を設立し、2005年法人化しました。

小林 1995年に子ども劇場、託児ボランティア、冒険遊び場、児童館職員など子どもにかかわる活動をしていた女性10人で「エンゼルプランを考える会」を結成し、子育て支援の研究や提言を行ってきました。その会を発展させて、子どもの権利を守り女性の自立をすすめるための活動を行う団体として1998年にMIYAGI子どもネットワークを設立し、2005年には法人化しています。また、同年、指定管理者として、市名坂児童館、小松島児童館、鹿野児童館の運営を開始。地域と共

に、学校や家庭をつなぐ役割を担うことも私たちが指定管理に進出した大きな理由です。MIYAGI子どもネットワークを母体として2001年にチャイルドラインinMIYAGIが設立し、2006年に法人化。

■現在の子どもと社会の変化

針生 子どもを取り巻く日本社会の環境変化に対する問題意識についてお話を伺いたいと思います。

大村 子育てでは親や地域が子どもを守り育てる役割が大切ですが、最近はそれがぎくしゃくしているように思います。昔は地域の中で子どもが互いに切磋琢磨し、様々なことを体験を通して学んでいたことが現在は欠落してしまっています。子どもが自分の想いで自ら行動し、それをバネに社会で生きていける力を育てる環境をつくる必要だと思っています。今、自分が何をしたいのか分からない大学生が多いです。また好きなことを追いかけて自分を追い込んだことがないので、自分の限界が分からない。他にも大人になって人間関係をうまく作れないとい

◇出席者◇



大村 虔一さん
特定非営利活動法人
冒険あそび場—せんだい—
みやぎネットワーク
代表



土佐 昭一郎さん
特定非営利活動法人
ミヤギユースセンター
代表



小林 純子さん
特定非営利活動法人
MIYAGI子どもネットワーク
代表



針生 英一さん
特定非営利活動法人
せんだい・みやぎNPOセンター
理事

□コーディネーター□

うように、後々に影響が出ていくように感じます。

土佐 今の子どもは生きるという人間の持つ本能が欠落してしまっているように感じます。それは地域や家庭から生きるということを教わっていないためではないでしょうか。また、学校教育の延長が社会に様々な問題を起こしていると思います。学校から求められる家庭教育というものと家庭が最終的に求める我が子の将来というものにギャップがあるように感じています。学校と家庭が教育や子育てと一緒に取り組むことこそが、今一番求められていることではないかなと思います。

小林 一番にお話ししたいのは、子どもは変わっていないということですが、生まれてきた時はまっさらで、そして環境の影響に左右されて人格が形成されています。決して子どもが変化して突然変異のようになったのではないことを押さえていたいと思います。最初に接する家庭環境の核家族化により、お母さんのみという子どもが増えていきます。子どもの成長にとって様々な人といういろいろな形で関わり合うと

いうのはとても大事です。また、ネットの普及によりお母さんたちは情報が多すぎて迷っています。専門の方に何かを教えて欲しいという事が多いですね。しかし、どんなふう育てても、子どもは育つのだということ为先輩のお母さんから安心させてあげることが大事なので、そういう意味でもNPOが子育て支援をするのは大切です。

大村 何年も前の息子の話ですが、小学校で凧を作って多摩川へ揚げに行く授業がありました。でも学校で一度揚げた後は、見向きもしません。子どもたちにとってそれは学校から与えられた仕事で、凧を揚げたい欲求のない人に教えても面白さが湧いてこないことが多いです。好奇心をもつて取り組めば、自分からいろいろ知りましたが、試してやってみるものですが、プログラムされた教育システムでは最初の動機づけを定着させにくい部分があります。学校だけでなく、地域や家庭がやらなければいけないことが多いのではないのでしょうか。

■社会状況を見て

針生 社会的な状況や制度に関する評価と課題についてお話をしたいと思います。

大村 昔は、家族が家計費を稼いだり家事をこなしたりするのに一生懸命という環境に子どもが育ちましたが、現在は子どもが家事の手伝いをさせることも少なくなりました。情報過多の時代になり、昔の子どもが知らずに育った情報が子どもの周りにあふれている。そうすると体験せずに知識として覚えることが増え、そのまま大人になってしまふ。私たちが子どもの体験にこだわる理由というのは、体験を通して身に付けると、それが子どもの生きる力として、応用のきく知識に変化していくと信じているからです。大切なのは体験する中で、社会がどう変わらなないといけないのかを自分たちで気づき、その構造を理解して、実践する姿勢を身に付けることだと思えます。家庭から学ぶだけでなく、地域社会とともに変わらなければならぬと思います。

小林 本来、親も子どもも力を
持っているのですが、行政など
力のあるものに支援されること
で弱まってしまいう危険性がある
と思います。ですので、力を育
むという視点から周りが何をし
たら良いのかを考える必要がある
のではないのでしょうか。それ
を見極めながら一人ひとりへ対
応するような仕組みになってい
けば良いと思っています。

また企業についてですが、企
業からの依頼で託児に行くこと
があります。時には夜の7時以
降の預かりを依頼されますが、
NPOとしては子どもを夜遅く
まで預けようという姿勢を簡単
に促すわけにはいきません。時
には子どものことを考え、断る
勇気も必要です。こういうなか
で、お互いが理解しあえたら素
晴しいと思います。

土佐 私もつい6年前までは企
業に勤めていましたが、企業も
社員の働き方やその家族の生活
について、今までは社の利益の
ために切り捨てていたことを、
ようやく自分たちのこととして
考えていく場を作ろうという動
きが出てきたのは確かだと思
います。

■今後の目標

針生 では、各団体のこれから
の目標をお願いします。

大村 そうですね、冒険遊び場
をコアにしながら子どもが育つ
環境を地域でどう変えて行くか、
地域の人たちと考え、行動する
活動を各地に広げていくこと
です。プレーパークを始めた当初
は仲間以外誰の支援もありません
でした。それが現在は全国で
200を越す団体が活動をして
います。そのいいモデルを仙台
にも作りたいと思っています。

また、冒険遊び場以外で行
われている体験型の子どもの成
長に関するプログラムなどと、
ネットワークを組んでいけたら
よいのかなと思っています。現
在あそび場は仙台周辺に4箇所
ありますが、それは支える人た
ちのボランティア力があって
こそです。プレーリーダーの役
割は重要で、その働きかけで地
元の利用者が増えたり、支援者
になって組織ができたりする
ところもあります。彼らの地域へ
の働きかけによってその後の動
きが随分違うんです。ですから
プレーリーダーの育成と地域の
関わりはとても大切です。長く

根付かせていくためには、地域
の人がサービスを受けるお客様
でいるのではなく、自ら支え、
汗して、本当に自分たちの望む
子育て環境を実現するシステム
を構築する、それがテーマであ
り、活動の醍醐味だと思います。

小林 私たちの団体は、今のス
タッフから次の世代へ立ち上げ
時の理念をどう伝えていくのか
というところにきています。職
場として働きやすく、しかも子
どもを支えるプロとしてやって
いく人材を育てていくのが、こ
れから挑戦していかなければな
らないところだと思います。ど
のような形で人材育成を行って
いるかという点、一例ですが、
児童館の職員にはチャイルド
インの養成講座を受けてもら
います。そうすると子どもとの接
し方が違ってくるし、みんな同
じ講座を受けているので意識統
一ができています。また、接客
は七十七銀行の研修へ行かせて
いただいで学んでいます。

土佐 最近ですが、団体の設立
当時の目的と社会から求められ
ている活動に大きいギャップが
あると感じています。高校中退
者やその年代の支援が大きな目
的だったのですが、いつの間に

か対象年齢が低学年から20代半
ばまでと幅広くなっています。
もともとの対象とは違ってき
ていますが、これもミヤギユー
スセンターの目的である青少年
の自立支援を考えると当然とも
感じています。

また、この4月からLDやA
DHDというような軽度発達障
害児への特別支援教育が学校に
取り入れられることになってい
ますが、昔はそういう人たちが
地域で育つ場や生活できる環境
があったわけですね。ところが今
はそういう環境にありません。
特に学校教育を終了すると支援
する行政の機関もないというの
が現実です。今後はそのような
子どもたちが個性を生かし、生
き甲斐を感じられるような社会
環境作り、支援の在り方につ
いて政策提言をしていきたいと思
います。

小林 今、本当にそうなんです
よね。学校でいろいろな問題が
取り上げられて、学校の中では
守られて育っているのですが、
いったん社会に出ると難しい。
そこを受け入れられる社会でな
いといけないと思います。障害
がある方に対して、それはそ
れで受け入れて、その人のいい

ところを生かせる社会でないと
 本當の教育はできないですよ
 ね。また、今の学校教育は画一
 的だと思ひます。はみ出ちゃう
 子は邪魔な存在になるので、そ
 の中でいじめも発生するわけ
 ですよ。そういう学校の右なら
 えの価値観で子ども達は苦し
 んでいるので、そこを変えて
 いかないと子どもの問題はど
 んどん増加するばかりではな
 いでしょうか。学校に居場所
 が無い子どももあつても、児
 童館ですごい能力が発揮でき
 るというか、自分がいられる
 場所がある、話を聞いてくれ
 る大人が一人でもいれば生き
 ていけるんですよ。それが今
 の子どもたちはなかなか得
 られないのかなと思ひます。

■せんだい・みやぎNPO
 センターへ寄せて

針生 最後に対センターへの
 期待をお願いします。

大村 NPOの仕事の仕方、社
 会への受け入れ態勢はまだま
 だなわけです。民間支援組織は
 NPOと経済社会と行政の取り
 組みやボランティアな活動、そ
 れらを含めてみんなが豊かに
 楽しく暮らせる状況を作るため
 のひとつの砦なわけですよ。そ

れを意識させ、いろいろな活動
 を巻き込めれば面白いと思ひ
 ます。

また、NPOの法的裏付けも
 まだ中途半端だと思ひます。例
 えば、課税対象収益事業で利益
 が出た場合、法人全体では赤字
 でも課税の問題が生じるとか、
 不都合なことがいっぱいです。
 状況としては不満があるけれど
 もその不満をしっかりと声に
 変えて社会を動かしていく、行
 政を動かすだけではなくて企業
 なども動かしていく。その仕事
 は期待したいですよ。

土佐 NPOという言葉に対し
 て敷居が高いと思ひている人
 たちや、NPOって何だろうと思
 っている人たちがとても多いよ
 うに感じます。もっとNPOと
 いう活動について発信して欲
 しいと思ひます。それぞれの団
 体の活動や中身も大切ですが、
 NPOという言葉の理解がもっと
 大切なように感じます。もちろ
 ん市民だけではなく県や市、中
 間支援組織の方たちにも少し
 NPOという事を理解してもら
 えたらいののかなと思ひます。

小林 やはり全てのNPOを対
 象にしてらっしゃるので、広く
 浅くになって、そういう意味で

は行政とあまり差がなくなる危
 険性があると思ひます。また、
 同じような講座がみやぎ
 NPOプラザやエルパーク等
 で開催されているので、重なら
 ないようにもう少し情報を集め
 て、それぞれがうまく調整し
 あって結集できるようにすると、
 受ける側としてはいいかなと思
 っています。

担当：加藤哲夫、遠藤孝志、本田ふみ

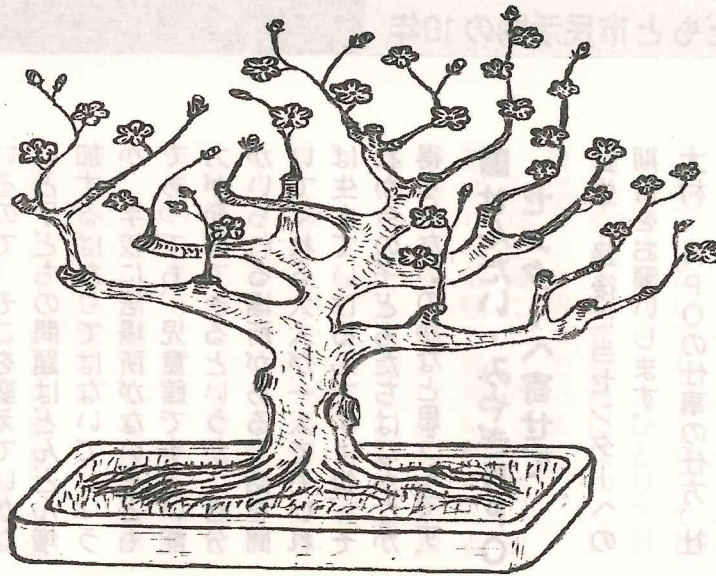
活動紹介

◆特定非営利活動法人MIYAGI子どもネットワーク
 子どもにかかわる活動をしている全国の団体と情報交換をし
 ながら、子どもの権利を尊重しつつ、子どもが生き生きでき
 る環境を整えていくことを目的に活動している。

◆特定非営利活動法人ミヤギユースセンター
 不登校や悩心保護者や当事者へ情報提供と基礎学力回復支援、
 不登校や高校中退者等の高校卒業（または資格取得方法）へ
 の情報提供と学習支援、その他青少年の自立のための支援を
 目的に活動している。

◆特定非営利活動法人冒険あそび場—
 せんだい・みやぎネットワーク
 「あそび」を通して子どもの育ちを支援する個人・団体をつ
 なぎ、冒険あそび場の理念を広め、子どもの健全育成とそれを
 支える社会教育の推進に寄与することを目的に活動している。

	社会制度の動き	仙台市の動き	座談会参加団体の動き
1947年	教育基本法施行		
1948年	児童福祉法施行		
1987年			仙台冒険あそび場設立
1994年	エンゼルプラン策定		
1995年			エンゼルプランを考える会設立
1997年		「仙台市すこやか子育てプラン」策定	せんだい・みやぎNPOセンター設立
1998年	特定非営利活動促進法施行		MIYAGI子どもネットワーク設立 せんだい・みやぎNPOセンター NPO法人格を取得
1999年	新エンゼルプラン策定	仙台市民活動サポートセンターオープン	
2000年	児童虐待の防止等に関する法律施行		
2001年	認定NPO法人制度施行		ミヤギユースセンター設立 NPO法人格を取得 チャイルドラインinMYAGI設立
2002年		「仙台市すこやか子育てプラン」 第2期行動計画策定	冒険遊び場-せんだい連絡会設立
2003年	次世代育成支援対策推進法策定 特定非営利活動促進法改正 認定NPO法人制度改正 地方自治法一部改正により 指定管理者制度の導入が開始		冒険遊び場-せんだい・ みやぎ連絡会に改称 せんだいファミリー サポートネットワーク設立
2004年		仙台市子育てふれあいプラザ のびすく仙台オープン	宮城英語教育支援協会設立
2005年		「仙台市すこやか子育てプラン」 第3期行動計画策定	MIYAGI子どもネットワーク 冒険あそび場-せんだい・ みやぎネットワーク NPO法人格を取得
2006年	教育基本法改正	仙台市民活動サポートセンター 移転オープン 海岸公園冒険広場オープン	



大滝 精一

問われる

コミュニティカの真価

Opinion Column

代表理事 大滝・加藤のオピニオンコラム

キーワードは、「人材育成」と「拠点のパワーアップ」

市町村合併を契機にして、「コミュニティ」への関心が各地で急激に高まりつつある。少子高齢化の進展、合併に伴う公共サービスのレベルの低下への懸念、行政側の財政の逼迫、地方分権の流れなどの様々な要因が重なり、人々の目が「コミュニティ」へと向けられているものと思われる。「コミュニティ」を対象とした一括交付金制度の設立なども地域の住民の関心の的となっている。

特に市町村合併をした自治体では、この5年間くらいのうちに、「コミュニティ」がどのくらいの力をつけるかが問われることとなる。本来の意味での住民と行政の「協働」や「共創」の力が試されることになる。こうした「コミュニティ」の強化の流れは、それ自体としては住民にとって歓迎すべきことといえる。「自らのことを自ら決定し実行する」という本来の意味での地方自治が実現できる、またとない機会が到来したからである。

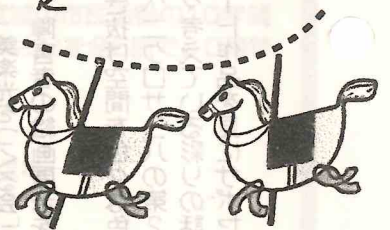
だが「コミュニティ」が力をつけ、自らを統治していくためには、克服す

べき課題も多い。なによりも住民の側に、自らの「コミュニティ」のニーズを見極め、それに優先順位をつけ、一括交付金のメリットを上手に生かしていく知恵と工夫が求められる。斬新なアイデアが必要ならば、か「コミュニティ」してなすべきことの合意形成を図っていくことも不可欠である。すでにこうした実践を重ねてきた地域はともかく、そうした経験に乏しいところでは、知恵と工夫を実践を通して学び取っていかねばならない。

そのためのキーワードは、「人材育成」と「拠点のパワーアップ」に尽きるように思われる。公民館や市民センターを「コミュニティ」の拠点に脱皮させるとともに、そこを中心に「コミュニティ」を担う人材を若男女を問わず創出していくことが、これからのカギとなる。各地のNPOセンターも、いまそこにパワーを集結し、住民と行政を新しいやり方で繋いでいくことが求められているのではなからうか。

寄稿 ささやかな貢献

河北新報社 報道部副部長 帷子康之



せんだいメディアテークで1月30日～2月2日に開催された、地球環境フォーラムに参加し

電話が怖い。新聞社のデスクに座っていると毎日、いろんな電話が掛かって来る。大きな事件が一本の電話から始まることもあるし、記事にしてくれという売り込み、苦情や抗議、勘違い、無理難題もある。受話器の向こうに何が潜んでいるか予測もつかず、電話が鳴ると緊張する。「読者相談室」という窓口があるのに、面倒な電話に限って報道部に掛かって来る。口べたな筆者は大の苦手だ。

二年ほど前のある日も、女性の声で電話が掛かってきた。また、不幸の電話、かなと警戒したが、ていねいな口振りで、どうやら記事にしてくれという趣旨だった。

「NPOを紹介するコーナーで、うちの活動を取り上げてもらえないでしょうか。」「しばらく先まで予定を組んであるので、すぐには無理ですが」と言うと、それで

も良いのでということだった。活動を紹介するチラシをファクスで送ってもらった。売り込みは毎日たくさんあるが、ニュース取材もあり、記者の数は限られている。

さて、どうしようか。急ぎの仕事を片づけてファクスに目を通してみた。宮城県内のNPOで、自力で理容室に行けない高齢者や障害者のために、出張して散髪やパーマを行う福祉介護サービスを有料で提供しているという。実家の亡母も三年間、寝たきり状態だった。こういうサービスがあったら、どんなに助かったかと思った。

理美容店に行けず困っている人がいて、もう一方で、それを助けたいと活動している人たちがいる。新聞が橋渡しをする意義はあるのではないか。都合もあって、紹介できたのは三ヶ月後。記事を読みながら、こちらも少しは世の中の役に立てたかな、と思った。

このフォーラムは、温暖化の影響により危機に瀕している地球について、いま私たちにできることを、ドイツの先進事例などを紹介するシンポジウムや、ワークショップなどを通してみんなで考えていこうという趣旨のもと開催されました。NPO、企業、行政などが参加する「地球環境フォーラム企画運営委員会」が企画・運営をしています。

2月1日は、留学生シンポジウム「ここが変だよ？日本人！」が開催されていました。留学生ゲストが、日本人のココが変！を発表し、中でも印象的だったのが「日本人はやりすぎ」という言葉でした。例えばスーパーでお肉を買うと、レジで店員がポリ袋に入れ、客はそれをレジ袋に入れます。会場内、「確かに」という顔をした人たち。でも、この中でマイバッグを持ち歩いている人が何人いるのでしょうか。湧きあがった“想い”を行動に移すのが難しいのです。

来場者全員が答える「環境〇×クイズ」では、正解するとマイ箸などがプレゼントされました。

会場の一角では、アーティストの日比野克彦さんをはじめ国内280人のクリエイターがデザインしたエコバッグが展示されていました。エコバッグを使うことは、ゴミの減量と資源の節約につながります。それは一人一人の小さな取り組みかもしれませんが、他の人に影響を与え、大きな流れとなるはずで。

会場内が“Imagine”と“We are the world”を大合唱し一つになり、シンポジウムは幕を閉じました。「環境問題」へアプローチするための仕掛けがたくさん散りばめられていたイベントでした。

担当：千葉 やす恵

2月1日(木)
地球環境フォーラムへ地球の気温が2℃上がったらへ
に参加しました。

主催／仙台市、仙台市地球温暖化対策推進協議会
企画・運営／地球環境フォーラム企画運営委員会

スタッフNPO体験記



常務理事

黒澤 学

昨年の総会で、加藤代表理事の思
い付きの謀略により、常務理事を拜
命した黒澤でございます。色つな
りの「ペニクロサンパ」、命名に私
は関わっておりませんが、「ペニク
ロ」はしめNPOセンターの色物ト
リオ、紅邑、黒澤、青木にご愛顧を
お願い申し上げます。もう2人、色
物が増えたらNPO連隊コロシヤ
ーでも結成しようかとずーっと考え
ながら新規採用の面接をしているア
ホな黒澤です。色物の方、お待ちし
ています。

ました。本町時代とは様変わりのピ
カピカのサボセンです。1、2階は
大きな吹き抜けて、大理石、御影
石、コンクリート、ガラスなどに
よるモノトーンの無機質な空間が広
がっています。

この空間を使って様々なアート作
品の展示を行い、サボセンをアート
センターにしていきたい。障害者に
よるアート、創作活動に取り組み
市民活動、様々な活動を通して創作
され、団体の倉庫に眠っている作品に
光を当てていきたい、と考えており
ます。

昨年の12月から2月末まで、「さ
をりひろば仙台」の協力により、さ
をり織りの作品展示を行っていま
す。併せてはた織り機も持ち込
み、8月の原爆展関連イベントで
展示する予定のさをり織りを、市民
が平和の想いを込めて一段でも織り
込む取り組みも行っています。

3月からは、「美楽光をつくる会」
の協力により、障害者の絵画展示を
行います。

無機質な吹き抜け空間を色々な色
で彩りたい。ペニクロサンパの第2
回は色物が色々考えている彩りの話
でした。アート作品を見にサボセ
ンへ行こう。

お知らせ

シニア活動推進連続セミナー

日時：3月6日(火)、3月23日(金)
共に13:30~16:00
会場：仙台市市民活動サポートセンター
6F セミナーホール
加費：無料
担当：紅邑、真壁、伊藤、小林
お申込みお待ちしております。

センターサロン「障害者
福祉施策の変遷と障害者自立
支援法について」

日時：3月9日(金)
18:30~20:30
会場：せんだいみやぎNPOセンター
参加費：500円
担当：真壁、千葉、小松(州)、遠藤(智)
お申込みお待ちしております。

加藤哲夫のNPO経営相談

日時：3月20日(火)、4月20日(金)
13~17時
場所：せんだいみやぎNPOセンター
相談料：2500円
(1時間単位、会員500円割引)
担当：青木
予約制です。まずはお電話を！

みんな編集後記みんな

バス停で、一度発車してから信号で停まっているバス
に、乗り遅れた乗客が道路に出てドアを叩くのを見るこ
とがあります。人のキケン感知感覚はさまざまですね。

ゆうささゆり

勤務している仙台市市民活動サポートセンターの1、
7階で、3月5日より、「美楽光をつくる会」による、
「エイブルアート(障がい者による絵画などの作品)」
の展示を行います。インスピレーションを刺激される力
作をぜひご覧ください。

真壁さおり

甥っ子がちょうど3歳。先日かまくらを作ったり、そり
遊びをしたりして丸1日楽しんだ。大人も子ども
のように無邪気に遊ぶ時間って大切ですね！

遠藤智栄

連絡先・振込み先など

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター
〒980-0804 仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル4F
TEL: 022-264-1281 FAX: 022-264-1209
E-mail minmin@minmin.org http://www.minmin.org/

郵便振替：02260-3-16325 特定非営利活動法人
仙台銀行 中央通支店：普通4094031 加入者：せんだい・みやぎNPOセンター

発行：(特活) せんだい・みやぎNPOセンター
代表理事 大滝精一・加藤哲夫

編集長：真壁さおり
編集班：遊佐さゆり、遠藤智栄
発行日：2007年2月28日
隔月発行(2007年8月まで)、無料
イラスト(表紙/6ページ)：関口憲一
デザイン：真山正太さん

